
IS ~ 人の造りし人間 ~

シンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〜人の造りし人間〜

【Nコード】

N6606U

【作者名】

シンジ

【あらすじ】

3年前、彼らは戦い生き残った

少年少女は17歳になり、それぞれの平和を満喫していたが、その平和も終わる

一機のエヴァ墜落事故

これを機に彼らを取り巻く環境は大きく変わる

そんな中で彼はほかの世界に飛ばされてしまった・・・

プロローグ

時は2015年。15年前の2000年9月13日に起こった大災害・セカンドインパクトで総人口の半数近くを失った人類は、使徒と呼ばれる新たな脅威にさらされていた。

国連直属の非公開組織である特務機関NERV^{ネルフ}は、汎用人型決戦兵器 人造人間エヴァンゲリオン（EVA）を極秘に開発し、予測されていた使徒の襲来に備えていた。そのパイロットに選ばれたのは、わずか14歳の少女たちだった。

ファースト・チルドレンである綾波レイ
セカンド・チルドレンである惣流・アスカ・ラングレー
サード・チルドレンである碇シンジ

彼らは傷付きつつも、次々に現れてくる使徒を倒していった
そして、すべての使徒を倒し、彼らはこれで平和になると信じていた

だが、彼らの平和はまだ訪れなかった
ゼーレの『人類補完計画』

子供たちが知らない間で、ゼーレは補完計画発動のための準備をしていた

また、補完計画発動時における『障害』に対する作戦も用意していた

だが、ネルフ特殊監査部所属・加持リョウジの活躍により、ゼーレのネルフ日本本部侵攻はネルフにも伝わった。そして明かされた驚くべきゼーレの正体と人類補完計画の全貌は、国連および日本政府に衝撃を与え、予定されていた戦略白衛隊によるネルフ本部侵攻は

中止とされた。とはいえ、組織内に浸透しているゼーレの細胞の暗躍により、日本政府、国連はともに混乱の極みに達していた。そのため具体的な支援策は遅遅として進まず、ネルフ本部は何時訪れるかもしれないゼーレとの決戦に独力で対応せざるを得ない状況となっていた。

予測されるネルフ本部へのゼーレ急襲戦力の中核は、中国を始めとする各ネルフ支部で調整中に消息を絶った5機以上の量産型エヴァンゲリオンだ。それもネルフ本部が把握していない、ゼーレ秘匿技術による対エヴァ用武装強化が行われている公算が高かった。ネルフ本部で現在稼働中のエヴァンゲリオンは初号機のみ、零号機は口スト・再建中、式号機は先任パイロットの不調により運用が危ぶまれる。戦力差は歴然だった。

ゼーレの介入により表向きは凍結されていた「ATフィールド偏向制御運用実験機」通称・F型エヴァの実戦化が加速される。緊迫化していく状況の中で、シンジたちは、それぞれが最善を尽くし義務を果たしていくのだった…。

第壱話 スイカ畑の追憶 ネルフ日本本部急襲（前書き）

しばらくはもとにした小説とまったく同じ展開にして書きます
読みにくいからおもいます
すいません（．．．）

第壱話 スイカ畑の追憶 ネルフ日本本部急襲

戦闘汚染区

初夏

アスカ・ラングレーは、華著なタウンサイクルで汚染区へ入った。ぴりっとした陽射しの中、風を切って走るのは心地よい。が、周囲は見渡す限り赤茶けた荒れ野だ。

昔はきれいな森だったんだけど。アスカは眩しげな目で辺りを眺め、視界の隅に光学フィルタの閃きを捉えた。

知能化（AI）センサーさん、24時間勤務ご苦労さま。彼女は戦略自衛隊の物々しい警戒ぶりに少し笑う。いま、AIセンサーはレーザで彼女を走査し、^{スキャン}「チルドレン」と確認したのだろう。

今日のお出かけは、『スイカ畑の偵察』が目的だ。

あいつ。アスカはいつ考えても”こつちゃ”になる難問を、また想いうかべる。なんで加持さんの真似するの？ まあ、許すけどさ。……って、なぜ許すのよ？ 私。

碇シンジは、去年からスイカを育てている。

畑が誰かに荒らされる心配はない。ここはエヴァの血に染まった戦域で、戦自と”汚染”のウワサがスイカを守ってくれている。

シンジは水やりの手を止めて、彼方の山々を眺めた。人と”シト”が揮った暴力で姿を変えた稜線から、わずかに”石棺”の天蓋が見える。昔、ジオフロントのあった所だ。

石棺は高力絶縁材で組まれた軽いドームで、内部を高真空／低エネルギー状態に保っている。人には理解できない理由で、中にある”ものが暴れださないように。

三年前のあの日。 シンジは、もう幾度めか、同じ記憶を辿りはじめる。 きっと、ぼくはリセットされたんだ。 . . .

状況『Ultimo』 プラス14分

「シンジ君、心を静めて！ 偏向ATフィールドの制御マージンを超えるわ！」

ミサトの声。同時に、幾つも開いているディスプレイの一つ、インタフェイス画面が明滅し、シンジに警告を送る。

いま、残像を曳いて疾走する初号機のS？機関は、重攻撃原潜四隻の核出力を超えるパワーを発揮している。熱交換素子からの凄まじい排熱は高温大気を生み、素子アレイが積層された背面装甲は、風に巻かれた陽炎で揺らめいて見える。

エヴァを制御するため、人が付け加えた機械の出来は悪い。機関出力の二割強、原潜一隻分のエネルギーは伝達ロスで無駄な熱に変わる。だが、素体 エヴァ本体のエネルギーロスはゼロ。むしろ既存の物理法則では、あり得ない数値だ。

長大なストライドを描き、0・2秒サイクルで駆ける脚が着地する寸前、木々がなぎ払われ、岩を押し潰して、何かに圧縮された平地が現れる。それはエヴァの着地衝撃を受け止め、紅い多角形のモアレを閃かせる ATフィールドだ。

初号機のF型装備は、フィールド偏向制御の試験装置でもある。シンジはATフィールドを足下に展開し、強固な地盤代わりにした。大面積のフィールドは、戦車の1万4000倍あるエヴァの接地圧や、跳躍め衝撃で地盤が崩れるのを防ぎ、脆弱地での高機動を可能にしてくれる。

初号機は秒速93メートルで戦域へ突入した。直接視界（LOS）が一気に開け、森林に散開した純白のエヴァ量産機と、攔坐している真紅の式号機がシンジの目に飛び込む。頭部をロングノースの槍で貫かれた式号機の姿は、まるで不気味な宗教画だ。シンジは情報リンクが途絶している事も忘れ、叫ぶ。

「アスカあつ！」

第壱話 スイカ畑の追憶 ネルフ日本本部急襲（後書き）

はい

今回は微妙なところで区切りましたw

次回はもっと長くなる予定ですw

第壱話 スイカ畑の追憶 ネルフ日本本部急襲 2（前書き）

はい

まだしばらくこのタイトルが続きますw

第壱話 スイカ畑の追憶 ネルフ日本本部急襲 2

戦闘汚染区 初夏

電動四駆のトレッドが砂を噛む音と、「やほお」という呼びかけで、シンジは”今“に戻った。振り向くと、無愛想な形をした戦自の野戦車から、葛城ミサトが降り立つところミサトは腕組みし、わざとらしくシンジを検分した。

「背、また高くなった？ やっぱ、男の子はでくなるわ。……結構いい男になりそ かな？ うん、楽しみ」

いま彼女は、戦自統合幕僚本部とネルフをスムーズに連携させるため飛び回っている。立場は幕僚本部付将補だが、内実、ネルフ側が無理を通せるルート造りに励んでいるらしい。

「もう『うん、楽しみ』ネタは聞き飽きちゃったよ」

「おお、素早い口応え。オトナになったね」

ミサトはシンジの側に立ち、彼が眺めていた方角を見る。

「また、思い出してた？」

状況『Ultimo』 マイナス50秒

「葛城二佐 ブリーフィング結果は」

「エヴァ・パイロット及び、各課幹部へ行いました。人類補完シミュレートには、皆が打ちのめされたようです」

「政府も同じだ」碇司令は言葉を切り、ざらついた声で笑う。「加持はよく働いた。 行政府の連中も”個“を失いたくはない。もしゼーレに怯えて、傍観を決め込んでも……」

「待っているのは、物理的な白己の喪失ですね」

「そつだ。機動支援グループのシステム立ち上げは？」

「エヴァ戦闘データ及び、整備、機材データとも、超並列コンピュータの増設バンクへ移植完了。超並列は82両の装甲車に分散配置し、生存性を確保しました。整備機材と拘束装置の積載は、あと9時間で完了します」

碇司令は肯き、公式レコーダに目を遣る。

「いま、02:35。貴官に、ゼーレ来襲時の状況発令権限を与える」

「ヴァンプ弾着！ 部分軌道及び、低伸弾道爆撃。弾着数2024発、12秒で4波。本部とのリンク途絶、しかしシミュレート・モデルはジオフロント内に損害なしと予測！」

権限委譲から未だ26時間、ずいぶん早いお出ましね！
弾着の衝撃に、激しく振動する車内でミサトは毒づく。

ミサトたちの重装甲車は、既にジオフロントから40キロはなれていた。が、ゼーレが放った一撃は想像を絶していた。

「センサー群は壊滅と判定。あれだけ防護しといたのに！」

「配置はバレバレなものね。いまだき動かないモノは生き残れない。機動支援グループは？」

「健在です。車両間情報リンク回復まで　いま35秒」

ジオフロントは大丈夫。いくら凄くても”人“の攻撃だもの。あの装甲区画は、シトかエヴァでなければ壊せやしない。さて　ミサトは息を整え、平静な声で告げた。

「上級指揮官命令により、状況『Ultimo』を宣言する。全作戦、エヴァ支援システムの指揮権は本職へ委譲された。以上、情報リンク回復しだい、機動グループへ伝達して」

『Ultimo』は、ミサトが与えられた発令コードだ。

発令後は、数百平方キロに散った機動グループの編む情報ネットワークがエヴァ支援に当たる。むろん、分散機動とジオフロントのどちらが安全かなど、誰にも分からない。

「方位2400ミルに大型全翼機、エヴァ搭載機と推定！」

「零号、初号のF型換装は？」

「リンク途絶、現況不明。予定射出時刻は、初号470秒後、零号は620秒。予測モデルは、各々プラス116秒/Minと言ってます。リンク健在のエヴァは式号機のみ。……あ」

エヴァの遠隔管制をしていた伊吹マヤは、息を呑む。

「地底湖の式号機、アスカのシンクロ率上昇中。ハーモニクス、偏差を超えるスパイクなく安定。……あの見当識レベルで、信じられない。いま29パーセント、38……53」

震える声で報告するマヤをさえぎり、アスカからの着信。

「ミサト！ 行けるよ！ 獲物は量産機？」

心理解析モデルを見なくても、声を聞けば分かる。あの高慢ちきな子は帰ってきた。……でも ミサトは逡巡したが、保護者の不安より、野戦指揮官の判断を優先する。

「式号機出撃、遅延戦闘。零号、初号の状況は、逐次送信」

「軽あるく、あしらってやるわ。見てて！」

「匍匐飛行（NOE）で近接する新たなヴァンプ！ いや、識別信号（IFF）確認。戦白の無人攻撃機（UCAV）、十数機……いま、リンク確立しました」

自律するUCAVから送られてきたのは、センサー投下予告だった。智能化された、新型の機動装甲センサーらしい。

さて、センサーで見てるだけ、なんて事はないでしょうね。出方によっちゃ、エヴァで官邸を制圧しちゃうよ。ミサトは凄みのある笑みを浮かべ、考える。その時、中央ディスプレイの画像が切り替わった。

「敵エヴァ降下！」

戦闘汚染区

初夏

アス力は、愛車のサイドバックから保冷パックを取り出し、スイカ畑へやって来た。彼女は自分のワンピース姿に見とれるシンジに、とりあえず、「どこ見てんの」サインを送り、素早くミサトに向って敬礼を決める。

「将補閣下、我が具申の改修装備に付き、ご裁可は……」

「はい、そこまで。」しょーほ“って呼ばれるの、なんか」

「むずむず、する？ 子供の意地悪だよ。これ、おやつ」

「もう子供で通せる背格好じゃないわよ。……あら、さすがにクォータ。しばらく見ないうちに、また胸が」

「もう『胸』ネタは聞き飽きたってば！」

状況『Ultimo』 プラス15分

「戦自より通告！ 投下AIセンサー群、戦域情報ネットワーク構築完了。データリンク いま！ 戦自は、指向……」

「初号機突入！ LOS画像受信、敵量産機、展開中！」

ミサトはコンソールの端を爪が剥がれそうな力で握り締め、初号機と同じ視野が広がるスクリーンを凝視する。

なぜ気付かなかったの？ ゼーレの方がS？機関に習熟してて当たり前じゃない！ 素体の再生も早くて当たり前、それに、連中がロングヌスの槍を試作している情報も入ってた。ゼーレにとっても、

これは決戦。なら、試作品だろうが、有るもの全部つぎ込むのは定石じゃないの！　身を焼く怒りに苛まれているミサトを、マヤが不安げに覗っている。指示を待っているのだ。

マヤの視線に気付いた、ミサトの中の”将校“は、焦燥と自責の念に破綻しそうな”人の心“へ皮肉の楔を打ち込む。

戦術も立てられず、何の命令も下せないなら、とにかく指揮官らしく構えていたら？ただ。ミサトは歯を食いしばる。まだ終わりじゃない。秘匿行動を命じておいた、綾波の零号機が無事なら、必ず勝機が目の前を過ぎる。絶対見落としちゃだめ！

「……行ける」突然、ヘッドセットに日向マコトの声が入る。彼はミサトのコンソールへ、試作シミュレートモデルをブレーク・インし、怒鳴った。「野戦指揮官へ意見具申！」

ミサトはモデルを一瞥して息を呑む。

「戦自のAIセンサーは、戦域の多方向から量産機を精密にスキャンしています。ロングノスの槍は無敵でも、連中はそれを投擲しなけりゃ……。ここに対シト戦での、綾波の投擲パターンをモデル化して当てはめれ……」

「OK！　ビールをおごるわ！　青葉君、初号機とのリンク、以降、途絶不可。厳命する！」

「離しやしない、任せてください！」

ミサトはいっせいに動き出したスタッフたちを見渡す。

なんて勢いで未来予測モデルを立ち上げたの。センサー情報とのリンク、システム構築……やるわね。戦自やゼーレの電子戦闘員でも、ここまで速くはない。ミサトは短く笑う。見つけた勝機は逃がさないよ。

生物学的に洗練された、白亜の巨人は全9機。エヴァ支援ネットは刻々変わる激位置を教えてくれるが、何の策も授けてくれない。だが、シンジにも支援を乞う余裕などない。

いま、彼の眼中にあるのは、欄坐した式号機のみ。たとえ初号機が切り刻まれても敵の阻止線を突破し、アス力を救うこと以外、何も考えられないのだ。

突如、LCLを介した警告音が、ダイレクトにシンジの一次聴覚野を打つ。そしてシンジを阻止するように、眼前にディスプレイが開いた。

《JSSDF / Link 23 / CAI・Net / 注意！ 黒機とのリンクは上級司令部合意による。強制リンク切断は自動否認される》

「シンジ君！ 戦自が情報支援に当たるわ。指向性のハイパワー電子ノ光学妨害もやってくれるみたい。ま、それだけけど。こっちで解析した敵攻撃予測モデルをフラッシュで送る。見落とさないで、気を抜いたら死ぬわよ！」

エヴァ支援ネット内の超並列は、戦自のAIセンサー情報を解析し、予測モデル化するたび精度を増して行く。それは槍の投擲姿勢に入ろつとする量産機を瞬時に識別し、シンジへ警告する。しかし敵は

多く、判断の猶予は数ミリ秒だ。

対する量産機は、実時間ゼロの精神波リンクでシンジを追いつめ、なぶり殺す實力を持っていた。しかし、人が加えた拘束装備や、人に送信するためのセンサー類が、強力な電子ノ光学妨害でダウンし、本来の”速さ“を発揮できない。

LCL接続で、運動感覚がエヴァサイズに拡大されているシンジは、機動限界のアクロバットを続ける。しかし初号機を髪一筋で外れた槍が、瞬時に脱出速度に達して大気圏を去る、恐怖の衝撃波を、二度”肌“で感じた。

警告音と共に表示された戦域図が、量産機の阻止線を突破したと告げる。前方正対の姿勢を取ると、すぐそこに式号機。

「アスカ！ 大丈夫？ 状況を……」

近距離レーザー回線を開いてシンジは呼びかける。だがそれに応えたのは、半ば悲鳴に近い叫び声だった。アスカは、大破した式号機と壊れゆく白分を再起動するため、精神力の全てを注ぎ込んでいたのだ。

再び、警告音と共に戦域図が視界へ割り込む。9機の量産機は、瞬時に二人を包囲していた。槍を持つものは5機、残る4機も、素手で初号、式号機を解体する構えだ。

時間を稼がなくちゃ、一ミリ秒でも。シンジは、綾波が無事であることを祈る。 防御じゃない、攻撃だ！

言葉より速く、大脳辺縁系　人が原始から受け継いだ”殺し“の領域が、兵装起動を行う。メニュー表示に8ミリ秒、アイポイントで選択。同時に音声コマンド　LCL中では筋電位センサー入力のため、発声するより遥かに速い。

「S?、全ボルトへ無制限入力！射出！」^{バーシ}

F型装備の両肩装甲ブロックが弾ける様を開き、漆黒の球が覗く発射機が現れる。球体は逆位相空間を包含したATフィールドで、亜光速の電子束を、鉄塊に匹敵する密度で封じ込めている。だが、S?機関と同様に、入力、増幅の原理は未解明。つまり極限領域でなにが起きるか誰にも分からない。

インパクトボルトが飛散すると、量産機たちはすばやくATフィールドを展開した。が、同じフィールドを外殻とする史上最強のキャパシタは、紅いモアレを閃かせてATフィールドを貫通し、炸裂する。瞬間、激光が戦域を紫に染め上げ、戦白のAIセンサーは4割が焼損し、量産機の光学センサーも全てダウンした。

解放された高エネルギー電子束は、量産機に襲いかかる。その表皮は爆音を上げて蒸発し、濃密な熱雲となつて機体を包む。炸裂位置から量産機までの大気はイオン化して強電界を生み、電子束の飛翔経路に沿って、大地から空へ向かう雷が林立した。

センサーやアンテナ群を焼かれた量産機は、人とのデータ交信が不能になり、そのダミープラグは与えられた行動原理に則つて、機体を準拘束状態に置いた。ゼーレ構成員も人に過ぎず、エヴァを完全に解き放つ勇氣はないのだ。

しかし、それも長くは続かない。S?機関の持つ驚異的な再生能力

は、人がエヴァに付け加えた機器までも修復するからだ。データ通信が回復すれば、自由を得た量産機はシンジたちの屠殺にかかるだろう。

シンジは、自分でも気付かないうちに、末だ槍を持つ量産機から、式号機をかばう位置に移動していた。手にあるのは、大質量と傾斜機能材の先鋭な刃で敵を両断するマゴロックスのみ。シンジは、みるみる外皮を代謝して修復する量産機を見つめ、差し違える覚悟で襲いかかろうとした。

第壱話 スイカ畑の追憶 ネルフ日本本部急襲 2（後書き）

はい

いかがでしたでしょうか？

実はこれラスボスにする予定の敵を出すための
長すぎる前置きですw

一気にすっ飛ばすとわからなくなるので書いてますが、不要ならば
とばしますw

第壱話 スイカ畑の追憶 ネルフ日本本部急襲 3（前書き）

まだまだ続きます

第壱話 スイカ畑の追憶 ネルフ日本本部急襲 3

シンジは、みるみる外皮を代謝して修復する量産機を見つめ、差し違える覚悟で襲いかかるうとした。

そのとき、鋭敏な初号機のセンサーが、彼方の山麓で閃く異様なフラッシュを捉えた。コンマ数秒で七回のフラッシュが観測され、量産機のうち7機が、凍りついたように停止する。だがシンジには、何が起こったのか確かめる余裕はなかった。すでに精神波リンクが回復していた残存量産機は、彼よりも素早く事態を悟り、攻撃行動に移ったからだ。一機は弐号機頭部を貫いているロンギヌスの槍を引き抜いて立ち向かうとし、もう一機は回避機動を行いながら、ジオフロントへ駆けて行く。

弐号機に取り付いた一機は、突き立つ槍に片手をかけ、もう一方の手をシンジに向けて、手のひらに強力なATフィールドを発生させた。シンジは偏向ATフィールドを初号機の左肩に集中し、量産機のATフィールドへ激突させる。多角形のモアレが紅く燃え立ち、初号機の当て身は止められたかに見えた。が、シンジは踏み出した右足を軸に初号機を半転させ、敵量産機の胸元に滑り込み、削ぎ上げるようにマゴロックスを揮った。

ほんの一瞬だったが、シンジは大質量の鋭利な刀身が、表皮装甲から素体の骨格を両断し、ダミープラグを叩き折るのを感じた。一呼吸の間、姿を保っていた量産機の頭部は、首元から頸部にかけてずるりと滑り落ち、地響きを上げて足下の木々をへし折った。

“LCL中にも拘らず、” 殺害“の興奮に胸郭を膨らませていたシン

ジに、初号機は停止した量産機7機の画像解析結果を告げる。彼方のフラッシュから「実時間ゼロ」で到達した”何か”が、量産機のダミープラグを貫通破壊したようだ。

ありがとう、綾波。 シンジは戦域外にいるはずの綾波に感謝した。綾波の零号F型装備機は、エヴァ支援ネットから精密な敵位置と未来予測モデルの情報を得て、「天使の背骨」と呼ばれるATフィールド銃で、地平線の彼方から大地と山々を貫き、量産機のプラグを撃ち抜いたのだ。

白兵戦の”熱”からシンジが醒めるのを待たず、初号機のセンサー群は、自律してジオフロントへ向かった一機の索敵を行っていた。しかし、稜線から垣間見えるジオフロントに戦闘の気配はなかった。センサーは温度や放射線のわずかな異常を捉えていたが、それどころではなかった。大破した式号機から、アスカを回収しなければならぬのだ。

式号機のエントリープラグは遠隔操作され、頸部から半分ほど突き出していた。しかし、いくら救援や助言を求めても支援ネットからの応答はない。排出されたLCLの滴を避けながら、シンジはプラグ側面にある認証パネルを叩く。装置は瞬時に彼のDNA解析を終え、装甲ハッチを開放した。

戦闘汚染区 初夏

あの日。 アスカは石棺を眺めながら、思い返す。

私、白分でもよく分からないまま、シンジに助け出された。……なんか、泣いてたような気がする。メディカルチェックが終わって、シンジと会ったのは三日後。

「ようつく聞いときなさい」とか言つて、脚を組んで人差し指を立てて、シンジに講義したつけ。

「その一、私は量産機9機を片付けたエース。その二、なのに突然、孤立無援で死にかけたら、人は”破局反応“ ってのを起こすの。分かる？」　その時の振る舞いを思い出し、アスカは心の中で笑う。
完全に子供だね。ダメじゃん。

でも、その日から、シンジ相手なら気取らなくてもよくなった……
つても、なんかここ3年、じゃれ付いてるだけの気もするし。それでいいの？ シンジ。

アスカは隣に立つシンジをそつと覗い、どきりとした。一瞬、加持の横顔がオーヴァーラップしたからだ。

シンジなんか。まだ子供だよ。加持さんには遠いね。　アスカは評論家ぶって心を静める。

あの日、アスカ救出時に情報支援がなかったのは、リンク不調のためではない。「サードインパクト」つまり人類補完発動の恐怖に、ネルフも戦自も、全てのセンサーとシミュレータモデルを投入して、ジオフロントを探っていたからだ。

戦域を離脱した最後の量産機は、ジオフロントへの突入に成功した。しかしゼーレの期待もむなしく、量産機を”呑み込んだ“ジオフロントは沈黙した。軌道からの画像解析で、そこが漆黒の「卵形境界」に包まれ、”凍り“ っていると分かった。

この現象の解明に役立っただろう、ゼーレ幹部は逃亡するか白害し

た。同じく研究を率いるべき、碇司令以下のネルフスタッフは境界の内側におり、その履歴には既に《K I A（戦死）》と記されている。

3年前。シンジたちは”見知らぬ明日“へ踏み出したのだ。

第壱話 スイカ畑の追憶 ネルフ日本本部急襲 3（後書き）

感想、誤字報告などお待ちします

第式話 帰還者たち

生命圏監視者

昼側なら三百六十度望めるその地平線は、振り返ってみるまでもなく、前方視野の中に閉じた曲線として収まっている

青く丸い地球を頭上に見上げ0・0エヴァが軌道を回る。

このS2機関外装式宇宙環境型零号機は三機、百二十度の角度を空けて飛び、三機が作る三角配置に地球を入れている。

搭乗するのはレイを培養していた人工子宮から引き上げた彼女の並列クローン

レイ・カトル、レイ・サンク、レイ・シス。

それぞれ薄目を開けたままじっと動かず、それぞれのエントリープラグに深く腰掛けている

……時間が止まっているように静謐な世界

揺れているのはレイたちの髪……プラグ内のLCIは、彼女たちに呼吸酸素を運ぶために緩やかに流れ

このアクアリウムの中で眠る、繊細な人形のような少女の髪を揺らしている。

その循環ポンプの小さな音。

遠くで静態停止寸前まで出力を絞ったS2機関がわずかに唸っている。

これは……彼女らは監視迎撃システム。

その彼女たちがまどろんでいる。

なら今は平和、とりあえずそいうことだ。

かつてのネルフ本部を襲ったゼーレの量産型エヴァ。

その屍骸の大半は移動中もしくは移動先で行方をくらませたが、襲撃現場、すなわちネルフ本部で即時解体された3体からは、パワー源と言うべきS2機関が摘出されていて、その後建造されたゼロGゼロ気圧型の零号機機種ボディに外装された

この0・0エヴァ三機が軌道を巡るのは、消えた方のエヴァ量産型を発見、殲滅するためであり、行方不明の量産型の屍骸を探すために、同じ量産型の屍骸のパワープラントで動く0・0エヴァはどこか皮肉めいているが、とにかくもこれにより送電ケーブルから解き放たれ、こんな長期の遠隔単独作戦も可能になった

指令を受け取れば十秒ほどでレイたちは目を覚ます。

約三十秒で0・0エヴァはアイドリングから戦闘出力まで覚醒し、約九十秒で右手に握るエヴァ最大の長尺火器ガンマ線レーザー砲が見渡す限りの地表、地下五百メートルまでをフルパワーで狙撃できる。

0・0エヴァは三機が軌道にあることで地球上の死角を事実上なくし、あらゆる通信に耳を澄ませ目をこらしている。

全地球上使徒探査餞滅ネットワーク。

ネルフJPNがその構築に全精力を傾けた探査迎撃システムだ。

この軌道上の狙撃網の構築は、エヴァを軌道上に運び上げる算段以上に、まず各国にそれを認めさせることが大変で（各国からすれば

エヴァは地上兵器だから容認でき、圧倒的な能力があっても日本という小さな島国で運用する分にはその行動範囲が限られている。それが飛ぶ、しかも制空権の空け渡しに等しいこのネットワークは主権の侵害といわれても仕方がなく、ネルフJPN総司令葛城ミサトは事実上エヴァの武力を背景にした恐喝じみた方法で権力を拡大行使し、防備計画を押し通した。

警戒すべき第一は姿を消した残りの量産型エヴァの復活。

防御構想の書面冒頭には必ずそれが明記された

だがもつと漠然とした不安を、関係者は共通して抱く

――補完計画は確かくじいた――

しかし計画の中心近くにいた者たちはことごとく姿をくらませており、すなわち計画を失敗させたあと世界がどうなるかは、誰も示していないのだ。

使徒の出でこない世界が日々平和に弛緩していくその中で、警戒を維持するには武断的手段に出ることもやむを得ず、総司令葛城ミサト以下、ネルフJPNの、エヴァに関わる人々は自分たちが世界の鼻つまみ者の色を日々濃くしている自覚はあったし、自分たちの心配が杞憂に過ぎなければ、それが一番いいと思っていた。

0・0エヴァは太陽側に傘を向け、頭頂部で地表を仰ぐ。

増感された頭部センサーと両肩の受信アレイで青い空をなめながら、その集積情報をネルフJPN本部に送りつつ半分眠るレイを体内に抱いて軌道を飛ぶ。

綾波レイのボディは複製できても綾波レイという存在は唯一、一人というのがこの世界の理のようで、0・0エヴァに乗り組むことを宿命づけられた三人の綾波には魂が宿らなかった。

それは過去の実験でわかつていたことでそれでもこの三体、魂がいままの三人の新しいレイたちカトル

サルク、シスが人工子宮から取り出されたのは、本部戦前から在籍する魂を持つレイがトロワとなって、その三人を最終的にコントロールする方法、精神ミラーリンクが編み出されたことによる。

図式で語れば単一コントロールなのだが実際は一＋三の四人のレイで、離れていても一人のように振る舞い、逆に単一存在かと思えばボディによって思考に微妙な差違は生じ、一つの心で違う四人のようにも見えた。

これは技術というより訓練の成果で、現段階ではジャミングの手段がないこと、それに伝達がゼロ時間で緊急時の即応性が高いことが特徴にあげられる

ただし、一つの魂で常に四人を覚醒し続けることは難しい

だから軌道上の三人は浅く眠り続けているのだ

綾波レイ・トロワが意識を移すイメージで、三人のレイは覚醒する

少し前、0・0エヴァはステージ2の新型拘束装甲に換装するために一機ごと種子島宇宙センターに降ろされ、再び打ち上げられたそのときも宇宙常駐のレイたちはレイ・トロワが意識を移すまではいつも半分眠っている、それが彼女たちの見た目だ。

三人はそれぞれ感じたものを脳に刻むとともに感覚を共有する

一＋三、だが魂は一つ、そういうシステムのはずだ

- - - - - 新たなチルドレンを作らない - - - - -

これはネルフJPNだけでなく、綾波本人の意思でもある

第参話 スーパーエヴァンゲリオン

「あんたたち、着替えてきたら？」

アスカのその言葉に、高校から戻って制服の姿のままのシンジとトウジは“なんで？”という顔で振り返る

「いや・・・この流れで離れるのはちょっと・・・」

初号機も、式号機や0・0号機に続いて新型装甲に転換する、そのゆゑ話だったはずだが

「せや、スーパーはないやろスーパーは！決まってまうで・・・
って惣流、なに笑とんねん！」

見ればアスカは制服からとっとと着替えたノースリーブのあらわな肩を震わせ

「ぷつぶくくく・・・スーパー・・・スーパーエヴァンゲリオン？
タンタタン」

彼女のよく通る声で有名なドとソのフレーズが静かな発令所に響き、ミドルデッキ、アンダーデッキの通常シフトのオペレーター数人が振り仰いだ

・・・クスクス笑う声も・・・

「イイわミサト、すごく馬鹿っぽくていい！初号機だけそれでいきましょ」

会話の一同は発令所トップデッキにいて、総司令席に座るミサトは
“いい名前なのになんで？”と顔に書いた心底意外そうな表情――
――シンジとトウジにはそれが寒かった

「それにヘン？マイナーチェンジとか、バージョンアップ後の兵器
改名じゃよくあるわよ？スーパ―」

「変じゃナイない！サイツコオ」

「黙つとけイ！胸以外にも栄養まわせや――！」

「ハッ！あんたこそなくした手足のほうに脳みそ入ってたんじゃないの？！」

アスカは長い片腕を腰に当てると、トウジが突き出した指に触れんばかりに豊かすぎる胸を納めたタンクトップを突き出し――
――トウジはあわてて指を引いた。アスカは鼻で笑う

「ずるいぞ、オマエ！」

「あーんもお汗臭い、シャワー浴びてついでに頭冷やせば？」

金髪の少女は意地悪く笑う

少年たちは本部内ジムで体を動かした
シンジは鍛える――軽くだがこれでもずっと続けている

実のところ黙々と何かを続けるのは嫌いではない

だが、前と違うのは盲目的に没頭することは出来なかつし、彼の立場でそれはもう許されなかつた

なにしろ三年前に彼が『その後』を決定してしまった今の世界なのだから加持の畑を地上に移したのもシンジだ

トウジは鍛えると同時にサイバネティクスの腕と足の同期とサイズ補正を確認している

二人は汗をシャワーで押し流して、今はケージでエヴァを見下ろしながら涼んでいた

トウジのかつての身体損傷部のうち、臓器は培養臓器と入れ替えられたが、手足の再生医療は見送られた

保成培養を終えた彼の腕と足が繋がれようとした時、除去したはずの感染型使徒バルディエルがどこからともなく現れ、発症の兆候を覗かせたのだ

その場の使徒発現は、手足を接合しないことで回避された

エヴァのカタチ、人のカタチに感応する性質らしいその使徒が、また体のどこかで活動を始める危険性については排除できず、彼は機械の手足を持つ身となった

チルドレンナンバー（フォース・チルドレン）としては抹消されたが、その後厳しい監視が付くくらいならと積極的にネルフに顔をだし、そこそこ高度の機密接触のパスも得て、パイロット間の連絡員のような仕事をしていた

何しろこの手足の維持には高い金も必要だった

「シンジは戦自の巨大ロボ見たか？」

「御殿場に来たやつだよ、ジェットアローンの半分くらいの背丈で戦車みたいにながちりしてる」

それは戦略自衛隊の大型脅威固体対処戦専従機動兵器で、名を“あかしま”という

古い言い方で台風を意味する単語らしい

N2リアクターを動力に持つ機械仕掛けの巨人は、使ってはいるがそもそも何のための人型存在なのかからないエヴァとは違う
コンセプトは明快で、地形を選ばない脚部と強力な二本の腕は、武器の把持旋回、場合によっては暴れる脅威の押さえ込みを想定し、ボディと四肢は体を支えるだけでなく格闘時の不意な応力に耐え、全身を装甲で鎧い、さらに姿勢とユニット配置の入れ替えで飛行でき、作戦時の展開機動力を高くしている
すごいのはそれらすべてを支援なしの単体で出来るということだ

「いいよね、飛べるの」

「高こつは飛べへん、グラウンドエフェクトや」

「でも高速巡航出来るってことだろ？」

「嬉しそうに言うな、エヴァ支援用の対使徒戦術兵器やそうやけど」

誰が聞くわけでもないが、トウジは声をひそめ――

「ホントはエヴァ駆逐兵器やないんかてハナシ」

シンジはピンとこない顔をトウジに向けた

「エヴァの運用はお金がかかるから、好かれてはいないと思うけど・・・、あ、だからここの近くに配備されたの？」

「ネルフ本部戦の時の戦自の介入、あれに懲りてミサトさんが頑張つて第三新東京市と芦ノ湖を囲む箱根山カルデラ内を、事実上国連の租借地と日本政府に認めさせた。いわゆる治外法権の特区や、それも外の連中は気に食わんやろ、出来りや取り戻したいってな」

「まあ・・・そりやそうか・・・で、外輪山の外からうかがっている・・・と？」

現在ネルフJPNは、F型初号機 F型零号機 弐号機 それ以外に軌道上に常駐する三機の宇宙型0・0エヴァ、計六機のエヴァを保有する人類最強の暴力集団といえる

うちF型零号機と弐号機の二機をのぞいた四機はS2機関を持つ初号機はゼルエル戦で使徒のものを暴走時みずから捕食し、0・0エヴァはネルフ本部戦直後、量産型エヴァの死体から引き剥がしたものを外装し、これらはほぼ無制限の作戦時間を有する

「んで、初号機はスーパーエヴァンゲリオンにパワーアップすると」

「大丈夫だよトウジ。“スーパー”は生まれない

この新規拘束装甲への転換計画は、たぶん流れる。あれは初号機には向いていないよ」

「せやな、あれは惣流と綾波が弐号機と零号機で育てたボディや、腰がキュウっとクビレとって、その・・・」

ハンドジェスチャーでエヴァのボディの変化を表したトウジの手が
そこで止まる

「・・・」

「・・・」

それがとりもなおさず、アスカと綾波の女性的成長を反映していると
気付いたからだ。

トウジは古風で、シンジは対人に難がある――だがこれは言い
訳で、二人とも年齢相応に、異性として同年代の女子を強く意識し
ている。

が、身近すぎる人物のこの場合、表現するのはなんだかきまづい

「えーと・・・」

エヴァは自分の体を作り変える

基本無機物で構成されているエヴァは、見かけ生物のように時々の
都合で振る舞う

高シンクロ状態での破損時の急激な自己再生が一番わかりやすい
破損した外部装甲も一緒に再生されることさえある

切開してみるとバラバラだった素材が傾斜材料のように分子レベル
で結合していたり、効率のよい形態に変化が見られるなど、明らかに
破損前とは別物になつてる場合が多い

整備する側としては厄介この上ない巨人だが、現在科学部技術部兼
任の主任である伊吹マヤは

これがエヴァの成長だろうという

そして、いまケージで誰もいない真夜中に音を立てるものがあると
すればエヴァだ。

巨大な植物のように時折メリメリと音を立てて少しずつ少しずつ形

を変えていく

これは三年前の本部戦以降のことだ

それぞれのエヴァの中の“存在”があまり表出てこなくなると、パイロットの自我が乗り込むエヴァの身体特徴に現れ始める
なかでも一番それが強く発現したのはアスカの弐号機だった

アスカはこの三年、何かと引き合いに出される胸の成長だけでなく
肩、腕、腰、足、すべての作りがすらりとしなやかになっている

「どこのモデルだろう」

ブロンドの髪をなびかせ、腰を軸に颯爽と風を切って歩く彼女を誰もが振り返ってみるだろう

アスカを成長させたのは、ただの三年という月日だけではなく、彼女の自信

かつてのナンバーワン自論は裏を返せば自信のなさの表れだ
相変わらず口は悪いが、他人に厳しい彼女は自分に一番厳しい

“任務でも普段の生活でも手は抜かない”

自信に繋がるのだから、ストレスと思っていたものからも充実を得られた

その彼女の成長と自信がエヴァの基本素体ボディに変化をもたらした
その素体に合わなくなっている旧来の拘束装甲は外され、形状に合わせて新たな拘束装甲が作られた
それがステージ2装甲

新拘束装甲でのスペック向上が判明すると、綾波の零号機も、本部

のF型零号機を除き

軌道上に進宙する三機の0・0エヴァも順次種子島でステージ2装甲への換装を行い、再び軌道上に戻された

綾波もアスカほど極端ではないが健康に身体成長していたから、零号機にもパイロットの成長に比した新装甲が与えられたのだ

だがここでもすれば重要な事柄を見逃される

エヴァの形状を決定するのはパイロットの自我意識、おそらくどんな体型の新型装甲でも零号機のボディは収まった――三年たった今でも綾波の自我形成は遅れたままだった

「時に、シンジは何で綾波避けとるンヤ？」

「えっ？」

突然振られてシンジは戸惑った

ここでいう綾波は、いま地上にいて、本部戦以前から一緒にレイ・トロワのことだった

あの戦いの後、彼女自身が、自分がシンジの母親のクローンであることをみなに明かし、うすうす気付いていた者たちを追認する形になり、シヨックだったが同時に納得できた

数日悩んだシンジも、綾波は綾波であると本人に言っただけはすなのだが……

「……別に避けていないよ、会えば挨拶だっしてしてるし仕事の話も……」

それはシンジがシンジに言っているようで……

「そおかあ？」

「……むしろここに来てミゾ広げと気が……」

「そうだよ」とシンジは言う

「どうやら簡単には聞きだせそうにない

あるいはシンジのことだ、自分でもよくわかってないのかも……」

「……さよか」

「せや、新型装甲いうなら……リツコさん放りっぱなしのゴツイのが旧地下階層にあるやろ」

「あれ、たぶん見た目より重いよ。スペック高いけどF型並みの重量あるんじゃないかな？おまけに足りないところだらけ……」
「ちよつと待てよ、トウジのパスだとあそこには入れないだろ！」

「あれがダメならこのステージ2やなあ」

「いけるんじゃない？シンジ細いんだし、昔はわたしのプラグスーツ着れたじゃない」

現れたアスカは会話に割ってはいるとシンジのシャツを背後からまくり上げ……ナマイキ！

思ったより広くなっている背中にムツとした。
なにげに筋肉までついている

「いつの話だよ……って、なに怒ってんのさ……?」

「うるさい!」

アスカはプイと横を向く

「惣流、綾波はどしたんや」

「今日は放課後生徒会だって言っただじゃない」

登場人物及び登場兵器紹介

登場人物

エヴァンゲリオンのパイロット

碇シンジ

本作品の主人公

第3新東京市立第壱高等学校に通う17歳の少年。学校では級長を務める。

搭乗機体はEVA初号機F型

三年前に比べて背が伸び、伸ばした髪を後ろで束ねる。
人間的に大きく成長している

綾波レイ

同じく第3新東京市立第壱高等学校に通う17歳の少女。EVA零号機F型のパイロット。

TV本編における三人目のレイである

N.O.カトル、サンク、シスと命名された三人のクローン体と精神リンクし、新宇宙戦力である0・0エヴァの運用に携わるなどネルフJPNの要ともいえる存在

三人のクローン体と区別するためにN.O.トロワと呼ばれることもある

惣流・アスカ・ラングレー

同じく第3新東京市立第壱高等学校に通う17歳の少女。EVA弐号機II式のパイロット。

ゼーレとの決戦を生き延びたという経験は彼女の精神的なわだかまりやトラウマを浄化して自信を持たせ、再び明るく朗らかな性格と

なった。

シンジとの距離は3年前に比べて近づいているが、碇ゲンドウという精神的支柱を失ったレイに遠慮して、少し身を引いている部分がある。

ネルフジャパンのメンバー

葛城ミサト

ネルフジャパン司令代理からネルフジャパン司令に就任。32歳

。戦略自衛隊での階級は将補。

人類補完計画の再始動を阻止すべく、崩壊しかけていたネルフ本部を再編、より強固なネルフジャパンへと改組した。

鈴原トウジ

第3新東京市立第壱高等学校に通う17歳の少年。

ネルフジャパンにてEVAのテスト機材の試験に協力。

失った左手足に自身の細胞から培養した手足を移植する予定だったが、移植直前に第13使徒バルディエルの復活兆候が見られたため、機械式の義肢を移植している。

後にチルドレンとのコミュニケーション能力を評価されて指令代理に就任。

相田ケンスケ

第3新東京市立第壱高等学校に通う17歳の少年。

EVAのパイロットに選ばれなかった無念さから、ネルフジャパン情報部のエージェントに志願

加持と共にゼーレの動向を調査している。

伊吹マヤ

ネルフジャパン技術開発局先端技術部マネージャー。
27歳。戦略自衛隊での階級は三佐。

メガネをかけているが、これは元上司の赤木リツコのものらしい。

加持リョウジ

ネルフジャパン防諜部所属。ゼーレから量産機の侵攻計画を盗み、ネルフ本部へリークするなど、補完計画阻止の陰の立役者とも言える。ケンスケと共にゼーレの動向を追う

冬月コウゾウ

人類補完計画に密接に関わった人物として懲役刑を受けていたが、病気療養のため監視付きを条件に釈放される。

その後は京都で形而上生物学の研究を再開していたが、ネルフジャパンに復帰。

日向マコト

ネルフジャパンにてEVAの戦闘官制を担当。

青葉シゲル

日向と同じく、ネルフジャパンにてEVAの戦闘官制を担当。

碓ゲンドウ

補完計画が阻止された際、リリスの展開した謎の黒い結界に巻き込まれた。現在は生死不明

登場機体

エヴァシリーズ

初号機F型

F型以降のEVAはステージ2EVAと呼ばれる次世代型であり、初号機は中でも最も早く改装された。「A・T・フィールド偏向制御運用実験機」の俗称であり、その名の通りA・T・フィールドを用いた機動性の強化が図られている他、複数の使徒級兵器に対抗すべく「インパクト・ボルト」と呼ばれる指向性電撃兵器が装備されている。この兵器は、A・T・フィールドを用いたエネルギーチャンバー内で超高出力の電撃をチャージ、目標に叩きつける武装である。

しかし、同機の建造に際してネルフ本部の造反を予見していたゼーレは、大型火器の運用を限定的なものとするよう指示を出す。これによって手が大型化され、プログレッシブ・ダガー以外の兵装に対応できなくなった。これに対してネルフ本部は、EVA輸送用アームに偽装して様々な改修キットを開発。要塞都市に偽装配備し、多数の兵装を装備できるように対策、量産機戦に実戦投入された

零号機F型

ステージ2EVA。再建中の零号機を途中で改造、右腕部位に対使徒兵器「天使の背骨」を装着した。そのため動力源となるA・T・フィールドを確保するため右腕と右足を切除、右足部位に簡易義足を装着したため自力での移動は難しく、狙撃専用機として運用されている。F型装備の排除はできないが、その重装甲と「天使の背骨」の超長距離射撃能力により、単機でのヤシマ作戦の再現が可能といわれている。

零号機試製II式改・領域制圧機「0・0EVA」

ステージ2EVA。ネルフ本部攻防戦において鹵獲されたEVA量産機に試作零号機パーツを移植し、実用化した3機の機体。低軌道上に3機が位置し、常にどれかが第3新東京市上空に滞空し、大型線レーザー砲による全地球領域の即時狙撃網を構成している。E

V A量産機より移植したS 2機関を装備する。通称・ダモクレスの剣。

「O・O EVA」という名称は零重力運用型エヴァンゲリオン零号機の略称

式号機F型

ステージ2 EVA。本機のF型装備は、インパクトボルトなどの特殊兵装を取り去り、純粹に装甲強化のための装備として設計された。2振りの大型曲刀を装備し、格闘戦に主眼を置いた設計がなされている。システムが単純であるために整備性は非常に良好で、現地で拘束具を変更することも可能といわれていたが、パイロットのシンクロ不調等の理由で調整がままならず、目されていた量産機戦への実戦投入はされなかった

式号機I I式

ステージ2 EVA。ネルフ本部攻防戦で頭部を欠損したため、メインアイを四眼から双眼に換装。加えて、アスカの精神的成長と共に体躯を成長させた式号機に合わせ、新型の拘束具と装甲を装着したもの。

出撃時はエネルギー供給を有線式のアンビリカルケーブルから無線式のメーザー送信に改め、背部には巨大なエネルギー受信装置「レクテナ」を装備する。

戦略自衛隊兵器

戦略自衛隊・四式統合機兵「あかしま」

J AとV T O L機の両方の機能を有す後継機。陸戦では二足歩行戦車となり、空中では空中砲艦形態に変形し地面効果を得、飛行する。N 2リアクター搭載。通常時はパイロットとガンナーの複座タイプ

装備

天使の背骨

フィールドシンカー

正式名称「沈下型領界侵攻銃」。浸食型に位相変位させたA・T・フィールドに重粒子を乗せ、その後A・Tフィールドを通常通り展開。この時発生する強烈な反発力により重粒子を加速発射、使徒等の発生するA・T・フィールドを瞬時に相殺・貫通撃破する、超長距離狙撃型の対フィールド兵器。

ビゼンオサフネ

マゴロク同様の大型の日本刀。長大な刀身は、エヴァが展開できるA・T・フィールドのぎりぎりの長さになるよう計算されている。本編では弐号機が主に使用する。

マゴロク・カウンターソード

A・T・フィールドを刃に展開可能としたステージ2仕様。それまでのものは刀身にフィールドが発生しなかったため、実戦使用されていない。

第四話 墮天 1（前書き）

すみません！更新が滞ってしまいました

（m'・・・）mゴメンネ・・・

第四話 墮天 1

不意に軌道上の静かな調和が崩れた

カトルの瞼がピクリと動いて長いまつげの下に見えていた薄い瞳が開かれて、その目を通じてレイ・トロワは眼下に広がる青い星を見た

「なに・・・？」

地上を見下ろす0・0エヴァは地表を十センチ以上の精度で撮影しデータを地上に送るとともに

五×五メートル以上の動態反応はその場でふるいにかけ、交通機関から港湾施設、建機に建造物移動

大型海洋ほ乳類などをフィルタで除去、それらを除いた『何か』の動きに目を凝らしている

――それらには現在、特に注意すべき要素はない

――だがカトルは数字にならない何かを感じた

――ような気がした

レイの思考は複数の『自分』を巡る

「・・・物理的情報はない、エラーと判断すべきか」

「サルクはエラー判断を保留」

「シスはエラー判断を追認」

「トロワはエラー判断を保留」

「カトル、状況を再走査、環境データを含め・・・」

ここ箱根で第三新東京市立高校の白い夏制服に、ひとまわり成長した体を包んだそのレイはトロワ
すらりと伸びた白い足で帰路のリズムを静かに刻んでいたが、この
淡い妖精のような少女は突然びくりと立ち止まる

・・・パタン・・・鞆を落とした

暮れつつある西日がまだ暑いLRT停留所で、彼女、綾波レイ・トロワは自分の両肩をギュツと握りしめると、目の前に滑り込んできたネルフジャパン方面行きのLRTが再び閉めるドアを見送って立ち尽くしていた

・・・普段伏せがちな臉を見開き

「・・・なに？」

気づけば玉の汗が白い肌を伝う
制服の胸が大きく上下し、彼女にしては珍しく息を荒げて出た言葉
は・・・

「助けて！」

綾波らしからぬ大声で叫んでいた

――何か真つ黒なものが自分の中に流れ込んできた
四肢をもがれるような感覚のあと出し抜けにそれは消えて――

「他の私の声がしない・・・」

突然彼女はひとりぼっちになった

気付けば彼女はうずくまっていて、停留所へやってくる同じ制服の
学生たちが、彼女の叫びを聞いて何事かと駆け寄ってきた

発令所内に警報が響く

ネルフJPN本部は大騒ぎになっていた

この二年間、問題なく軌道を周回していた0・0エヴァ三機のうち
一機、カトル機が規定の軌道を割って高度を落とし始めたのだ

「テレメトリーが正常に送信されてきません！カトル機のステータ
ス不明！」

カフェテリアに出ていた責任者が戻る

「総司令入室されます」

「作業そのまま！」

振り向きかけるオペレーターを制してネルフJPN総司令葛城ミサトは発令所トップデッキに歩み進むと

階下ミドルデッキの日向マコトに通る声で問う

「レイ・カトルは？」

「呼びかけにこたえません！ バイタル不明」

「トロワはまだ学校？！ 彼女の側から呼び出してみて！」

それに同じミドルデッキの青葉が応えた

「警備部からです。その綾波レイ・トロワを下校中緊急保護したと。心神喪失状態らしく・・・」

「なんてこと！」

状況を知るすべてのチャンネルが途絶えた

「レイ・サンクとレイ・シスが混乱しています。バイタルも不安定、鎮静剤の投与を進言」

「任せます。彼女たちのエヴァの観測機材から何か見える？」

0・0エヴァ、サンク機とシス機的位置からは地平線の輪郭、青黒い、薄い大気越しにカトル機がいた座標が望める

明るい地球にデジタルマスクがかかるとキラキラかすかに光る何か
が現れた

「破片が散らばって………スペクトルからカトル機のも
のと……」

『こちらケージ！シンジです！0・0エヴァが、綾波の誰かが撃墜
されたって……！』

確かに、散らばる破片がそう見える

「まって、事故かもしれない。まだわからないの」

「屋外カメラを！タワー全天観測A1」

観測班から連絡が入り、オペレーターがメインディスプレイに画像
をまわす

「0・0エヴァのFSBフレアが……」

夕暮れの空にそれは見ることが出来た

東の空から現れた十字架状の光はN2核パルスのブラストをA・T・
フィールドでベクター制御した煌きで

エヴァの巨体を軌道に持ち上げるパワーを有す乱暴な推進器の光
再び増速して軌道を上げようとしているのか？

「東に向かって噴射している！減速している！」

………軌道周回方向と正反対だった

十字の光は東の空から後ずさるように、ここ箱根の空の天頂に速度
を緩めて至ると

空のと真ん中に停止するように達したところでいきなり消えた

「0・0エヴァFSB停止！軌道速度を失いました！当本部直上、鉛直方向で相対速度ゼロ」

「つまり？」

「地球自転に合わせただけの急角度の放物線、つまりは見かけ上真っ直ぐ頭の上からここに落ちてきているってことです！」

「燃え尽きる可能性は？」

「A・T・フィールドを失っていたとしても大気上層では燃え尽きません。軌道速度で大気に触れるわけではないので……大気の濃い成層圏以下まで突っ込んでから、広範囲に地下深度まで及ぶ衝撃波被害が出るおそれが……」

これは損傷による機能不全？

それともレイ・カトルは意図して？……いや、いまは……。

「軌道滑落事故と認定！第三新東京市および近隣都市の行政機関に緊急通達！地下シェルターへの避難を！落下衝撃に備えさせて！-

……レイ・カトルの応答は？！」

「呼びかけ続けていますが応答なし！」

なににせよ、落ちてくるなら、

「シンジ君！アスカ！エントリースタート！エヴァ初号機、式号機、発動！」

巨人を支えるすべての部署が開く
最後のワンコマンドで待ち構えていたシンジとアスカは自分のエヴァを即座に立ち上げる

「初号機は落下地点で0・0エヴァをA・T・フィールドで受け止めて！いつかの使徒みたいだね」

確かに、かつて受け止めたサハクィエルに比べたら0・0エヴァの巨体も質量は遥かに小さい

何より初号機はS2機関を得た分、発生させるA・T・フィールドも格段に強くなっているし、そのための集中トレーニングもこの三年欠かさなかったが。だが・・・

『初号機シンジ、了解』

――不安なのは久しぶりの緊急実働だからか？

「アスカの式号機は、少し角度を変えましょう。駒ヶ岳射撃ポストへ上がって」

駒ヶ岳は箱根山カルデラの中心、箱根山系の複数ある頂きのひとつだ
過去の戦闘で周囲の山系、とりわけカルデラの中で一番標高が高かった神山の山頂が崩落し、標高の順位が繰り上がったこの駒ヶ岳射撃ポストは第三新東京市を擁するカルデラ全域をおよそ見渡せる要の対空陣地で狙撃ポイントである

芦ノ湖の東側、ネルフ本部からは南南東に約四半に位置し、地上を

行けば複雑な箱根の山を越えていくことになるが、地下にエヴァの高速搬送路があり

山頂までは傾斜リフトで一気に登れ、外部電源を必要とする式号機でも緊急展開が可能な位置だ

『式号機アス力、了解』

三年ぶりの警報が市街地に鳴り響く中、本部発令所では青葉が外線を切って振り返る

「松代の戦自が協力を打診してきました、十勝の防空IRサイト観測のカトル機の生画像も添付です」

「逆さに読むと“ざまあみろ”なんですよ」

にべもなくミサト

「だったらまだマシです。今回の騒動、マッチポンプだと思われるかも」

実際そう非難されるだろう

使徒も量産型エヴァも現れず、とうとうネルフJPNはみずからアクシデントを演出したと――

「武官の作戦視察までは受け入れると伝えて。くる度胸があるからね。戦自の部隊がカルデラを越えないように注意して」

「了解！」

第四話 墮天 1（後書き）

これからは週一更新をめざしていきます

感想、誤字脱字報告などおまちしています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6606u/>

IS～人の造りし人間～

2011年10月9日00時22分発行